音の旅人

演劇と音響と劇場と（15）

市来 邦比古

前回の『ふたりの女』については2020年「東西とーざい」にも詳細を書いた。

『ふたりの女』は当初1979年12月末までだったのを1980年２月末まで続演した。第七病棟を始めてからは、劇団以外には年に１～２本演劇作品があるだけだった。ただし連日東京ミュージカルアンサンブルの作品、『石になったかりうど』と『歌どろぼうと魔法の笛』の上演で都内及び近郊の小学校で仕込み本番バラシを続けていた。土日や休日はモダンダンス、バレエの発表会や公演のリハーサルと本番を続けていた。学校周りは仕込み、サウンドチェックを30分程度で済ませることが求められ、私自身の技能がみるみる向上していったことが実感できた。またダンスやバレエでどんな大きな舞台であろうと変わらず向き合えるという自信がついた。

第七病棟の次回作品は決まっていなかった。1980年、1981年、1982年と『ふたりの女』が終わってからも小学校巡演とダンス作品のリハ、本番で私のスケジュールは埋まり、空いている時間に町屋の第七病棟稽古場に行くという日常だった。

1982年の春、制作者の高野勇、俳優田根楽子の夫君から秋オープニングする下北沢の本多劇場の柿落とし唐十郎作『秘密の花園』の音響を依頼された。私にとっての大きな転回点となった作品である。この作品で私はフリーの演劇の音響家として手を挙げたといっていいだろう。主演は緑魔子だという。第七病棟の『ふたりの女』の緑魔子の二役姿を見て唐十郎がヒロインのいちよともろはの二役で書き下ろした。

『秘密の花園』のチラシ

スタッフは作・演出協力：唐十郎、演出：小林勝也、美術：朝倉摂、照明：秋本道男、音楽：田山雅充、効果：市来邦比古、舞台監督：青木秀夫、企画：本多一夫　制作：高野勇、音楽の田山雅充は『盲導犬』以来である。田山以外のスタッフは私には初顔合わせである。

キャストは緑魔子、柄本明、藤井びん、田所陽子、石垣光代、新井敏也、小林勝也、山

崎哲、清水紘治である。柄本明とは自由劇場ですれ違い、東京乾電池の旗揚げのころお手伝いしたがほとんど初対面である。山崎哲は転位21を主宰していて『うお伝説』『漂流家族』で1981年岸田国士戯曲賞を受賞している劇作家演出家である、この時は転位21の藤井びんと共に俳優として出演している。『ふたりの女』の時観に来て、石橋蓮司と意気投合していてどこかの時点で第七病棟の次回作を依頼していた。翌年1983年の『子供の領分』から私も転位21の作品の音響を依頼され1992年まで続く。

稽古は下北沢の駅近くの本多スタジオ、狭い稽古場だった。通し稽古になるころまだ内装工事中だが舞台を使って稽古ができることになった。この時劇場の音響設計に入っていた民芸の山本泰敬と懇意になることができた。裸舞台に機材を持ち込んで稽古していたが、音響室や舞台の音響回線の確認をしている山本とあいさつを交わすようになっていた。新劇の音響効果の大先輩にあたるのだが、ある時、『秘密の花園』の音響どう思われますかと聞いたことがあった。音楽を多用していたのだが山本から音楽と音楽を続けて使う時、効果音をつなぎに使うと違和感が少なく効果的だよとアドバイスをもらった。

本多劇場に隣接してマンションが同一敷地に建っている。遮音が気になり何度か劇場で音を出し実験をしたことを覚えている。町屋の稽古場での遮音を気にするようになったことから始まり、劇場での遮音や響きに注目するようになり、建築音響を実地で学んでいった。

『秘密の花園』の２幕は嵐の真っただ中、日暮里の坂の途中まで水があふれかえり、窓を割らんばかりに風雨がたたきつけているという設定であった。流れ着いたボートが窓を破って部屋に入り、最後その船に乗ってヒロインが去るという。装置の窓の奥に大きなプールを設えボートを浮かべた。土砂降りの雨がその上に降るという仕掛けだったが、当初窓にたたきつける雨は演技で表現するとして用意されてなかった。２幕の場当たりが劇場で行われるとき、俳優が、顔面に被るような水があると思って演技してきたのだから実現してほしいと演出家、舞台監督らに希望してきた。唐十郎が状況劇場の面々を引き連れて乗り出してきた。金守珍や六平直政など後に状況劇場から分かれ、新宿梁山泊を作ったメンバーなど若手が、海水パンツでバケツを持ち次々と水を汲み、舞台奥のプールからたたきつけた。すさまじい水しぶきが上がり、舞台前まで水が届いていた。この時BOSEの802を初めて購入してフロントサイドスピーカとして使用していて、そのプラスティックの筐体が水をものともせず音を再生し心強かった。

装置の下は全面防水仕様になっていたが、大量の水で水漏れを起こすようになり、劇場階下の商業スペースに水がたれるということが起こった。厳重な抗議の申し出を受け、毎日装置の壁面を吊り上げ、床面を取り外し、

豪雨の中を去る

舞台面や奈落を含め、毎日水をふき取ることを余儀なくされた。舞台監督青木秀夫をはじめ演出部は朝の４時ごろまでの作業を続けていた。

『秘密の花園』の上演中、黒テントの演出家加藤直から電話が入った。1983年３月に黒テント作業場、黒テントは西武新宿線の都立家政駅から歩いて15分あたりにある稽古場を作業場と称していた。そこで佐藤信の初期作品『おんな殺しあぶらの地獄』を上演するのでその音響を担当してほしい、オペレーターは劇団員がするのでプランだけお願いしたいということだった。黒テントには矢吹誠という音響家が劇団員として所属していた、彼は遠藤琢郎のところの横浜ボートシアターの作品にもかかわっていた。そこではもっぱら音楽の作曲と生演奏を務めていた。彼が文化庁の在外研修でフランスのピーター・ブルックのところに行き、研修後も渡仏し更に研鑽を重ねるようになり、黒テントを退団していた。そこで私に依頼が回ってきたのだ。

スタッフは作・装置：佐藤信、演出：加藤直、作曲：林光、照明：松本直み、音響：市

68/71評議会通信

来邦比古、舞台監督：鈴木恵、制作：長谷透ほかである。キャストは新井純、高橋太郎、松井憲太郎ほかである。この『おんな殺しあぶらの地獄』は1969年自由劇場発足３年目に佐藤信自身の演出で初演されたものである。主役の聖・お吉は緑魔子の舞台デビュー作で今回は新井純が演じ、私は深いかかわりを感じていた。黒テントとはこの作品のあと５月本公演『アメリカ』から始まり1990年代後半まで続く縁になった。

オペレーターは当時黒テントに属していた相沢えり子を紹介された。相沢えり子は1989

評議会通信30号　1983年2月1日　（毎月1日発行）

1 二十四曲のうたと踊り ――作業場①は自動車工場とキャベツ畑のとなり

スタッフ
作　佐藤信
演出　加藤直
作曲　林光
照明　松本直み
音響　市来邦比古
装置　佐藤信
振付　裕　池一
効果　市来邦比古
衣裳　富田直美
小道具　岩井ひとの
演出助手　恵川智美
舞監助手　白鮮
舞台監督　鈴木恵
製作　長谷透
キャスト
聖・お吉　新井純
与兵衛　高橋太郎
兜　松井憲太郎
コスモス　金　津田　秀村　亀乃田　天竺　藤井　北川　山田　ラスコーリニコフ　中村　厚木　成沢　高松
M　亀乃田　成美
白崎　秀村　泰資
羊飼い　金　津田
鞭　松井憲太郎　金　津次
兜　松井憲太郎
耳売　金　津田
しろたま　藤井　智子
しろたま　北川　真理
しろたま　山田　洋子
ラスコーリニコフ　中村　光枝
或る別な人物甲　厚木　睦子
或る別な人物乙　成沢　富雄
或る別な人物丙　高松　正行

六八（七一）の春一番、本年度第一作として、佐藤信作、加藤直演出「おんなごろしあぶらの地獄」を、三月四日から稽古する。近松門左衛門の浄上演する、近松門左衛門の浄瑠璃に想を得たこの作品は、原作の油屋お吉を、ガソリンスタンドを経営する聖・お吉に置き換え、彼女をめぐるモーターリゼーションに夢を託した十人の十代女たちの幻想を軸に展開する。初演は一九八七年、作者自身の演出で結成二年目の「自由劇場」によって行われ、「聖・お吉を演じた緑魔子の舞台デビュー作となった。

今回の六八（七一）の上演は舞監助手白鮮、その他を舞台監督鈴木恵、与兵衛役の高橋太郎をはじめとした、若手中心の配役となっている。

林光作曲による、合計二四曲に及ぶソングナンバーを含むこの作品は、六〇年代演劇の中でも、とりわけ特異な文体をもった作品として知られている。青春期特有の精神の喪失感と、大村収容所に収容された密行者たちという生々しい現実が交錯する劇世界を、早なる八〇年代演劇の復活と演としてではなく、まぎれもないいま、空白の街に行き場を失った者たちの劇として再蘇するというのが、今回の六八（七一）の上演意図である。

愛ではなく憎しみをうたう、激しいミュージカルをつくり出したい。

日時　一九八三年三月四日（金）五日（土）六日（日）、十一日（金）十二日（日）、十三日（日）計六回上演
開演　毎夕六時三十分開場、七時開演
場所　西武新宿線都立家政駅下車六八（七一）作業場
入場料　前売券千四百円、当日券千六百円
ご来場前日までに、六八（七一）にお電話のうえ、予約番号をおとり下さい。ご予約の無い方は、当日整理券及びいとなります。当日整理券の発行は午後四時からです。
予約・お問い合せ先　電話〇三（九二六）四〇二二

2 〈悲劇の批判〉は何度でも有効だ、演出家加藤直によるマコト論

佐藤信の処女戯曲を含む初期三部作〈ハイスメネ〉〈八控室〉〈八地下鉄〉が、ソフォクレスの〈アンティゴネ〉を題材にした作品群であることは大変興味深い。だが誤解してならないのは、作者の意図が例えばオイディプス的状況へと作品を還元するのではなく、状況そのものをいかに非領域化するかを問うていることだ。――ここで突然カフカのことを想い出した。佐藤信に出会ってから今年

評議会通信は新聞形式で配布されていた

年私が自身の会社株式会社ステージオフィスを立ち上げるまでのメインオペレーターとして数々の演劇作品や舞踊作品に参加してもらった。

『おんな殺しあぶらの地獄』は道路から地続きで入ってこられるテントの作業場らしく、バイクの生のバク音がとどろいた公演だった。

今回はここまで。（つづく）

Information

NEWS PARK

「ホールの録音方式研修会」を開催いたします！

既に協会ウェブサイトでご存知かと思いますが、録音部会と劇場音響部会とが共同で、クラシック系音楽の数ある録音方式を体験して頂く研修会を企画しました。

この研修会では、ハイレゾの時代に大きく進化し、高品質が期待されるようになって来ているホールの資料録音の各方式などを解説、体験します。

演奏を実際に録音し、録音方式ごとに比較試聴して知識と経験を深めると同時に、ホールの設計、設備計画にも反映をされることを期待して開催いたします。

◎開催日時：令和６年８月９日（金）　13時スタート
（12時30分受付開始）

場　　所：東京芸術劇場 ５階 シンフォニースペース
〒171-0021 東京都豊島区西池袋１-８-１

受 講 料：一般 5,000円　会員 3,000円

定　　員：30名（定員になり次第、締め切らせていただきます）
（会員の方で仕込み・準備作業の見学、手伝いをご希望の方は午前９時から会場にお入りいただけます。）

講　　師：石丸 耕一（劇場音響部会）、京田 真一（録音部会）

ゲスト講師：塩澤 利安氏（日本コロムビア　チーフレコーディングミキサー）

演　　奏：東京芸術劇場ウインドオーケストラ

※開催会場である劇場への当研修会のお問い合わせはご遠慮ください。お問い合わせは日本舞台音響家協会までお願いいたします。